

子どもたちに郷土を知ってもらい、
100年後の国宝を作るといふ壮大なプロジェクト。

1583年に前田利家が入城してから、本格的な城作りが開始されるといわれる金沢城。曲線の美しい名城として知られていたが、1759年の火災(宝暦の大火)によって城内ごく一部を除いて全焼し、三階櫓や本丸御殿、二の丸御殿などすべて焼失。その後、二の丸御殿を中心に諸建築が再建されたが1881年に再び出火し大部分が焼失した。それから128年がたち、金沢城の中核であった二の丸御殿を復元することを最終目標として、石川県では「百年後の国宝を作ろうキャンペーン」がスタートし、関連するさまざまな事業が行われている。

100年プランを継承する子どもたちを育てよう!

「百年後の国宝を作ろうキャンペーン」は後世に誇り得る「日本の国宝」づくりを目指した石川県の県民運動で、1994年に作家の堺屋太一さんなどが協力して始まった。主催は株式会社 北國新聞社である。

「最終的な目標は市内にあった金沢城二の丸御殿を復元することにあります。県民が郷土を知り、郷土愛を育み、

団結して地域を活性化させていくというのが真の狙いです。北國新聞はそのお手伝いをしているのです」と北國新聞社の北村喜信さんは説明する。

すでに2001年には城壁の一部にあった五十間長屋が復元されているが、二の丸御殿の復元となると市内の真ん中にあり、そう簡単にはいかない。しかし、実現に向けての火を消さないことが肝心で、北國新聞社はこれまでも市民を対象にしたセミナーなどさまざまなイベントを行ってきた。

「ただ、これまでは大人を対象としたイベントだけでした。この事業は100年かけるつもりですから、次代を担う子どもたちに郷土を知ってもらい、興味を持ってもらうことが不可欠と考えて子ども向けの研修会を行うことにしたのです」(北村さん)

こうして企画されたのが「加賀藩ゆかりの辰巳用水・塩硝の道、五箇山、瑞龍寺を訪ねて」と題された親子バス研修である。

辰巳用水は金沢市を流れる約16kmの用水路で、一部は兼六園にも流れ、美しい曲水として知られている。当時

は金沢城の重要な用水路であった。今回の研修ルートは辰巳用水から始まったが、調べてみると地元の人も知らないような事実が次々と明らかとなった。

火薬工場の跡地。9メートルの石垣。新発見が連続したバス研修。

最初の訪問先は土清水塩硝蔵跡(土清水はづしょうと読む)。塩硝蔵とは耳慣れない言葉だが、ここは黒色火薬の製造工場だったのである。火縄銃に使用するものだ。黒色火薬の原料は、塩硝(硝石)、硫黄、木炭の3つで、それを粉末にする水車の動力源として辰巳用水が使われていたのだそうだ。材料となる硝石は富山県の五箇山(ごかやま)から山越えルートで運んでいた。これを「塩硝の道」と呼ぶ。五箇山も当時は同じ加賀藩である。

参加した小学校4年生の女の子は「こんな重要な遺跡が普通の畑の中にあるなんてびっくりです」と説明に聞き入っていた。さらに、3キロほど上流には、辰巳用水の三段石垣がある。長さが260メートル、高さが最大9メートルにも及ぶ立派なものだ。ただ、これが何



1997年に国宝に指定された瑞龍寺



火縄銃の重さを体験。子どもたちにとっては貴重な体験が目白押し

担当者より



想像した以上に有意義な研修になりました。

株式会社 北國新聞社 営業部
北村喜信さん

どんな子どもたちでも参加できるよう無料の研修会にしたいという気持ちがあり、費用の一部をAJOSCに助成していただいていたいへん助かりました。想像した以上に有意義な研修ができたと思います。子どもたちの反応もたいへんよく多くの感想文を書いてくれました。誌面を借りて改めて御礼申し上げます。

のための石垣なのかはわかっていない。今後の発掘調査の結果を待つばかりだ。こちらも普段は雑草に覆い尽くされており、これまでは半ば忘れられた存在だったのである。

このように、地元の人も知らないような遺跡が次々と現れてくる。バス研修に参加した20組の親子たちが目を丸くしていたのも無理はない。この後、一行は五箇山をまわり、「塩硝の館」や合掌造りの家を見学し、締めくりに高岡市の瑞龍寺を訪問した。加賀藩2代藩主前田利常の命により建造されたもので、江戸初期の禅宗寺院の傑作であり、1997年には国宝に指定されている。

「加賀といえば金沢というイメージでしたが、改めてもっと広がったのだと知らされました」と参加者の母親は感心していた。子どもたちも「知らないことがたくさんわかってよかった」と語り、郷土への興味を深めたようだ。

北國新聞社の北村さんは「満足のいく結果で、これは続けなくてはいけないなという思いがしました。AJOSCの助成をいただいたおかげで、最初の回ができたわけですが、今後も自力でスポンサーを募って子ども向けの研修会を続けていきたいと北國新聞では考えています」と語ってくれた。

50年かかるか、100年かかるかわからないが、いつかこの子どもたちが原動力になって、金沢城二の丸の復興がなされることを期待したい。



土清水塩硝蔵跡で説明を聞く子どもたち



まるで城壁のような辰巳用水の三段石垣



見学した合掌造りの家